airiti

DOI:10.6205/jpllat.39.201606.01

從生態批評主義閱讀後 311 文學作品
—以多和田葉子《獻燈使》為例—

曾秋桂
淡江大學日本語文學系教授

摘要

本論文主要是分析 311 之後刊行的日本文學作品之一的多和田葉子《獻燈使》(2014.10 講談社出版)。鎖定於作品中描繪之震災狀況以及作者多和田葉子為何 311 發生之後一路持續不懈致力於震災主題描寫之意圖。分析手法是依據生態批評主義中常被沿用之「環境思想中從以人類為中心主義轉移至以環境為中心之主義」、「以人類為中心主義之解體與環境為中心主義」主張為論述之骨幹，嘗試依此當作後 311 時代所需之環境為中心主義之觀點來分析文本《獻燈使》。並從中探索作者多和田葉子對於震災・核災議題的關心以及將之實踐於文學作品的理念。

業經考察所得出的結果顯示：作者勾勒暴露於輻射之下的日本島國的近未來的悲慘命運，是繼「不死之島」問世之後維持一貫關注核災議題的延伸。作者希望透過書寫核災呼籲日本國民意識到日本正面臨著嚴峻議題考驗的局面，才完成此寓言式《獻燈使》的創作。寓言式《獻燈使》的閱讀方式之外，還必須能窺得出作者的用意在於昭告世人：若不藉由正視環境課題而進行近代人類為中心主義的解構，當今人類所處的現代文明社會不免難逃因環境激烈變化而招致生存滅亡的浩劫危機。

關鍵字: 多和田葉子、《獻燈使》、生態批評主義、後 311、核災

airiti

DOI:10.6205/jpllat.39.201606.01

Post 311 literary works read from eco-criticism :At a center of Tawada Yoko “Kentoushi”

Tseng Chiu-kuei
Professor, Tamkang University , Taiwan

Abstract

This articl analyzed the situation of the earthquake disaster drawn on Tawada Yoko “Kentoushi” as post 311 literary works. This paper solves author Tawada Yoko's intention. This study performed the decipherment from a transition to the environmental center principle which is a main concept of eco-criticism from the human center principle in environmental thought, a demolition of a human center principle, and an environmental center principle.

As a result of considering, Tawada Yoko who tries to draw the near future figure in Japan exposed to radiation has finished writing a series of allegory works by drawing a nuclear power plant disaster. “Kentoushi” has appealed against demolition of the human center principle by a principle of the deconstruction by an environmental problem. And this work will be suggested that it is difficult for the contemporary civilization society in the crisis ruined by environmental upheaval to see the future.

Keywords: Tawada Yoko, “Kentoushi”, eco-criticism, post 311, nuclear power plant disaster

airiti

DOI:10.6205/jpllat.39.201606.01

エコクリティシズムから読むポスト 311 文学作品
――多和田葉子『献灯使』を中心に――

曾秋桂
淡江大学日本語文学科教授

要旨

本論文では、ポスト 311 文学作品の多和田葉子『献灯使』(2014.10 講談社)に描かれた震災の状況を分析し、震災をテーマに根気強く追求し続けている作者多和田葉子の意図への究明を目的とする。主にコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」のような、ポスト 311 に特に必要とされる環境中心主義の観点から、試みることにした。こういった視点から、震災・原発をめぐる作家多和田葉子の文学的関心と実践の軌跡を辿ることにする。

考察した結果、放射線を浴びた日本の近未来図を描こうとする多和田葉子は、作品「不死の島」以来、原発のテーマに関心を注ぎ、原発を書くことを通して、極めて深刻な状況に陥った日本社会のことを日本人に強く意識してもらうために、こうした一種の寓喩的作品を書き上げた。『献灯使』は、ややとすれば、ただの寓話として読まれてしまいそうであるが、環境問題による脱構築という近代人間中心主義の解体が行われない限り、環境の激変によって滅びの危機に立っている現代文明社会がポスト近代を迎えることは難しいことも示唆されている。

キーワード：多和田葉子、『献灯使』、エコクリティシズム
ポスト 311、原発

airiti

エコクリティシズムから読むポスト 311 文学作品
―多和田葉子『献灯使』を中心に―

曾秋桂
淡江大学日本語文学科教授

1.はじめに

東日本大震災(2011.3.11、「311」と略す)後、日本政府は 2050 年に「原発稼動ゼロ」[1]の目標を立てたが、福島原発事故が引き起こした諸問題に収拾がついたとは言い難い状況の中で、2015 年 8 月 11 日に九州にある川内電子力発電所の第 1 号機の再稼動[2]により、「原発稼動ゼロ」から遠退いていくことになってしまった。

「社会分析の分野で、二十世紀末においては最も影響力のあったヨーロッパの著作の一つ」[3]とされたウルリヒ・ベックの『危険社会―新しい近代への道』では、「危険として捉えているものはまずなによりも、直接は人間が知覚できない放射能」[4]と指摘し、「原子力時代の危険の脅威によって人類史上顕著な衝撃を被った。そして、この危険の脅迫によって(中略)国籍、空間、時間という概念が従来の意味を失ってしまったのである」[5]と言い、放射線のような「新しいタイプの危険は多くの場合人間の知覚能力では直接には全く認識でき」[6]ず、「子孫の代になってその弊害が顕著となる場合もある」[7]こ

---

[1] 2050 年の構想エネルギー・環境選択への未来 2014 年度報告書 2015.2.27」http://www.jcer.or.jp/policy/pdf/150227_policy.pdf(2015 年 6 月 7 日閲覧)
[2] 日新聞デジタル「九州電力は１１日午前１０時半、川内（せんだい）原発１号機（鹿児島県薩摩川内市）の原子炉を起動し、再稼働させた。東日本大震災後の新規制基準下で全国初の再稼働となる。」とある。
http://www.asahi.com/articles/ASH8C00GBH8BTIPE046.html (2015 年 10 月 3 日閲覧)
[3] ルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳(2011・初 1998)『危険社会新しい近代への道』法政大学出版局 p.462
[4] 掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 p.28
[5] 掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 p.3
[6] 掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 p.35
[7] 掲ウルリヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳書 p.35

airiti

とを特徴とする。ウルリヒ・ベックの論説を参考にすれば、核エネルギーがもたらす危険・事故は、いずれも地球全体の生態環境・人類に想像を遙かに超えた莫大な影響を与えるに相違ない。

生態環境と言えば、特に生態・自然環境と人間との関係を主題とする創作として、ノンフィクションやエッセイを指す「ネイチャーライティング」(nature-writing)がある。従来の文学ジャンルの自然・環境に関わる小説、詩、演劇などを含め、大学の科目としても設置されている「環境文学」(environmental literature)[8]を範疇に入れて、環境問題の顕在化を背景に、研究対象を広げて言う「ネイチャーライティング」(nature-writing プラス environmental literature」は、現代社会では普遍化されつつある。そうした中で、人間社会に限らず、人間を囲む外の生態環境・自然との関係に関心を寄せる研究・批評活動は、「エコクリティシズム」(ecocriticism)と呼ばれ、環境問題への危機意識に基づき、1990 年以後から発展した文学・文化の批評理論であり、方法論の一つでもある[9]。

311 以前から既にドイツに長年滞在し、越境作家として名高く、日本文壇でその存在を認められた[10]多和田葉子は、311 以後「全然違うテーマを考えていても、震災抜きでは今の日本は書けない」[11]と言って活躍している。また、震災をテーマにした『献灯使』(2014.10 刊行、講談社)に関しては、ドイツと日本の両国で日本語とドイツ語の創作を同時に行っているという「二重の存在だからこそ、日本語

---

[8] 藤貞通(2007)「環境文学入門：自然とのコミュニケーションを回復する」『メディアと文化』第 3 号 p.107

[9] 井千晶(2010)「『崖の上のポニョ』―海辺の生命の物語―」『千里金蘭大学紀要』7 号 p.80

[10] 田勝二(2011)「グローバリゼーションのなかの日本語文学―村上春樹・多和田葉子・リービ英雄―」『2011 年度台湾日本語文学国際学術研討会―全球化中的日本語文研究展望―会議論文集』台湾日本語文学会 p.11 では、グローバリゼーションの時代において、「ドイツでの生活を持続させたまままた日本語とドイツで作品を発表しつづけ、どちらの国でも高い評価を得ている」とある。

[11] 和田葉子・ローバトキャベル対談(2015)「やがて希望は戻る―旅たつ『献灯使』たち」『群像』1 月号講談社 p.224

airiti

と日本人と日本のおそるべき未来を描いた、こんな小説を書くことが出来たのだ」[12]と佐々木敦は評論している。従って、ポスト311の日本文学創作を論じるなら、多和田葉子の創作を抜きにしてはその全体を語ることが出来ない。

「献灯使」、「韋駄天どこまでも」、「不死の島」、「彼岸」、「動物のバベル」の5作品を収録した『献灯使』に描かれた震災の状況を分析し、震災をテーマに根気強く追求し続けている作者多和田葉子の意図を究明することを目的とする。なお、作品の分析に当たり、主に前述のエコクリティシズムの視点から、震災・原発をめぐる作家多和田葉子の文学的関心と実践の軌跡を辿ることにする。

2.エコロジーとエコクリティシズム

具体的な作品分析に入る前に、まず、エコクリティシズムの定義と、文学・文化の批評への援用について説明しよう。

2.1エコクリティシズムの定義

エコロジー・生態学(ecology)の概念に由来するエコクリティシズム・環境批評(ecocriticism・environmental criticism)は、批評理論・方法論として成立した。巴山岳人の論説[13]では、「エコクリティシズム（ecocriticism)」とは、20世紀後半における地球環境の破壊に対する危機意識を背景に形成され、生態学における諸概念や哲学などに見られるエコロジカルな思想を取り入れた文学批評のジャンルである。環境破壊の拡大に対し、文学の分野から積極的に関わっていくという姿勢、そして文学作品やその研究が環境問題の考察に非常に貢献するという意識がその特徴として挙げられる。「環境批評(environmental criticism)」とは、2005年にL・ビュエル(Lawrence Buell）がエコクリティシズムに代わる名称として提唱したもので、

[12] 『朝日新聞社』2014年12月14日

[13] 巴山岳人の論説は、http://www.asle-japan.org/環境文学用語集/エコクリティシズム-環境批評-ecocriticism-environmental-criticism/による。(2014年3月30日閲覧)

airiti

従来の「(原生) 自然」に重きを置いた研究の範囲を拡大し、社会における種々のイデオロギーや制度とも交錯するハイブリッドな領域としての「環境」を射程に入れることを意図とされている。しかし、現在でも「エコクリティシズム」は、この批評ジャンルを示す名称として一般的に使用されている。

2.2 エコクリティシズムの援用

エコクリティシズム・環境批評(Ecocriticism)は、松岡幸司の説[14]では、文学作品を生態学的スタンスで捉える研究手法として、1980年代からアメリカを中心に発展してきた、「自然」や「環境」を中心に据えた文学研究であるが、実際には文学作品全般の環境意識や自然の位相のみならず、エコロジー(思想)の立場から文化全域に及ぶ新しいパラダイムを提示する文化批評ということができる。野田研一は、エコクリティシズムの根幹については、「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移で、エコクリティシズムの領野とは、文学における人間中心批判の遂行、およびその結果としての環境中心主義の可能性を探る試み」[15] (下線部分は論者による。以下同様)と明示し、「人間中心主義の解体と環境中心主義は、とりもなおさず、縦走的にかつ歴史的に仮構されてある、私たちの身体と感性と思考の本性を解き明かす莫大な作業」[16]と付け加えて指摘している。

そこで、本論文ではエコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」のような、ポスト311に特に必要とされる環境中心主義の観点から、『献灯使』に収録された5作品を分析、比較対照していくことにする。

---

[14] 松岡幸司(2011)「『1842年7月8日日蝕』: 翻訳と解説―ネイチャーライティングとしてのシュティフター」『信州大学人文社会科学研究』4号 p.143

[15] 野田研一(2003)『交感と表象―ネイチャーライティングとは何か』松柏社 p.201

[16] 前掲野田研一論文 p.203

airiti

3.『献灯使』に収録された5作品の詳細

『献灯使』に収録された5作品の詳細を語り手、視点人物、作品時間、作品空間、重点内容、初出に分けて、細かく表(1)に整理した。

3.1『献灯使』収録作品の詳細

整理された表(1)を見てみよう。

表(1)『献灯使』収録の5本の作品詳細

作品名	語り手	視点人物	作品の時間	作品の空間	重点内容	初出
1.「献灯使」	第3人称	義郎・無名・鞠華・夜那谷	大厄災の後/不明	東京(日本)	脱出するしか希望は持てない鎖国の日本を生きている様子	『群像』2014.8号
2.「韋駄天どこまでも」	第3人称	東田一子	大厄災後の地震時	東京近辺(茨城)	避難中、性に貪欲な女性が相手に希望を待つこと	『群像』2014.2号
3.「不死の島」	第1人称/擬似第3人称	語り手の「私」	2023年	ドイツ・書籍によって伝えられた日本、東京	放射線から影響を蒙った前近代鎖国の江戸時代を思わせる日本の悲惨状況	『それでも三月は、また』2012講談社
4.「彼岸」	第3人称	男、瀬出郁夫	大厄災の後、飛行機が原子発	東京近辺、中国	大厄災後、再稼動の原子発電所の飛行機衝突	『早稲田文学』2014.秋

airiti

			電所に衝突した事故後		事故による放射能漏洩の影響を蒙った日本を脱出しなければならない悲哀	
5.「動物たちのバベル」(対話劇)		特定なし	大洪水の後、人間が絶滅した後	不明	大厄災後、人間が絶滅した後の権力中心の再建	『すばる』2013.8

表(1)に示した5作品のうち、対話劇「動物たちのバベル」と、最初に第1人称「私」で語り、途中から擬似第3人称のような語り方に変えた「不死の島」以外、3作品はいずれも第3人称で語ったものである。作中時間については、2011年に起きた福島原発事故から2023年に至るまでに具体的な時間を設定した「不死の島」を除き、他の4作品の時間が漠然と厄災の後とされている。その中で、「献灯使」で使われたタイムスリップの技法が目立っている。作品空間については、「動物たちのバベル」が不明である以外に、「献灯使」、「韋駄天どこまでも」、「彼岸」の多くは東京近辺に限定されているが、「不死の島」がドイツ、アメリカから日本(東京)の様子を覗き込んだりするように描かれている。主題に関しては、「遣唐使」をもじった「献灯使」と「彼岸」の2作品が日本脱出を強く訴えている。対話劇「動物たちのバベル」はともかく、『献灯使』では、大厄災後にも生存し続けなければならない人間が強く生きていこうとする姿勢が伝わってくる。以下、順次に各作品の分析に入ろう。

3.2「献灯使」の粗筋について

airiti

「献灯使」の主な登場人物が 107 歳[17]の義郎と、男の曾孫「小学校の二年生」(p. 154)の無名である。彼らの生きている時代は、老人が「死を奪われる状態」(p. 108)にあり、「生きていて当たり前なの」(P. 108)である一方、子供の「死亡率が高」(p. 108)くて、「健康という言葉の似合う子供のいなくなった世の中」(p. 28)で、「死ねない身体を授かった自分たち老人は、曾孫たちの死を見送るという恐ろしい課題を負わされている」(p. 48)。このような「バランスを壊された自然」(p. 107)に生きているゆえ、「新しい文明を築く」(p. 48)ために、「「献灯使」として選ばれた」(p. 150)15 歳の無名が、日本から「インドのマドラス」(p. 150)を目的地に密航し、無名の「健康状態に関するデーターは医学研究を通して世界中の人々の役に立」(p. 150)てようとする。無名が 15 歳へとタイムスリップした所で物語が終る。

3. 2. 1 語りの特徴

分量が 153 頁に及ぶ「献灯使」には、実は、ただ一日の出来事しか描かれていない。無名が朝起きてから、登校し、小学校の教室で担任の夜那谷が世界地図を見せてくれた瞬間、気絶した時までの出来事である。その多くの紙幅は、現在の義郎が過去の事を回想しながら、食料、生活習慣、言葉遣いの違いなどについて饒舌なほど説明に費やされた。また、無名が教室で気絶した後、「その時に時間を飛び越して未来に吹っ飛んでしまった」(p. 147)。いわば、無名が「献灯使」として選ばれた未来の 15 歳の時点へとタイムスリップしたのである。従って、「献灯使」の語りには、過去、現在、未来の三者を兼ね備えたことが特徴として見られる。ちなみに、タイムスリップした未来の世界には、もともと 107 歳の義郎が 115 歳になったゆえ、凡そ 8 年の時間をタイムスリップしたと推測されよう。

---

[17] 妻の鞠華が義郎に出した絵葉書にある「あなたの百八歳の誕生日のお祝いには」(P107)、「義郎は、百八歳の誕生日をどう祝うかについては具体的に計画を練る気になれなかった」(p. 108)とあるから、義郎が現時点では 107 歳のはずだと推測される。

airiti

もう一つの特徴は、第3人称小説「献灯使」は、視点人物を義郎に限ることなく、無名、鞠華、夜那谷の3人にも寄り添い、それぞれの内心世界を語っていることも特徴的である。これは、正に多和田葉子が「一人の視点から書いている小説ではなくて、視点の転換があります」[18]と認めた通りである。要するに主・副人物の視点とタイムスリップの手法が齎した相乗効果により、「献灯使」は広がりなおかつ奥行きのある作品に仕上げられたと言えよう。

3.2.2.駄洒落の言葉遊びによって紛らわす時代的鬱憤

「献灯使」には、多和田葉子が得意とする駄洒落の言葉遊びが見られる。例えば、外来語や英語や外国などに関する全てのものがタブー視されている「献灯使」では、「ジョギング」(p.9)が「駆ければ、血圧が落ちる」(p.9)という意味で「駆け落ち」(p.9)になり、もともとの意味から遠くかけ離れている。また、義郎が買った靴が岩手県産であることを「岩手まで」(p.11)と言っている。文中「この「まで」は英語を習わなくなった世代が「made in Japan」の「made」を自分なりに解釈した結果できた表現」(p.11)とある通り、「まで」をローマ字表記にすれば、「made」となり、英語の「made」に相当した所から作者が持つ豊かな想像力が認められよう。後に続く作品「韋駄天どこまでも」にも見られる。暗黒な鎖国された「献灯使」の世界に生きざるを得ないからこそ、内心に積み重なった鬱憤を駄洒落の言葉遊びによって紛らわす必要があることを作者は表明したかったに違いない。このことについては、作者が言った「笑いながら真剣に考えるという、二つの感情を同時に活性化するような能力を自分でも育てていきたいと思っているんです。(中略)何よりも楽しい仲間は、言葉や漢字なんです。そこで言葉遊びが出てくるんですね」[19]と説明した通りである。

3.2.3 自然環境に適応するために生物が引き起こした変異

自力でズボンさえ履くことが出来ない無名は、「蛸に学ぶ軟体生

---

[18] 同前掲多和田葉子・ローバトキャベル対談 p.223
[19] 同前掲多和田葉子・ローバトキャベル対談 p.219

airiti

活」(p.20)の好例であり、蛸人間になることは「退化」(p.21)とされたが、実は「進化」(p.21)へと歩んでいくとも言える。そして、生きている人間なら、「誰でも人生のうち必ず一度か二度は性の転換が起こるようになったのも自然の策略の一つ」(p.107)とあるように、性別の転換も自然環境の変動に適応するために生物が取った手段の一つだと理解される。実際に、15歳にタイムスリップした無名は、「女性になっている」(p.159)のである。人間だけではなく、植物の「新種雑穀」(p.58)、タンポポの「突然変異」(p.14)もその激しい環境変化に適応する生物の進化だと言えよう。

3.2.4 日本を脱出する課題

夜那谷が「ふさわしい人材を探し出して海外に送り出したいと考えている」(p.151)ことを目的に掲げた「献灯使の会」(p.151)のメンバーが、「精神的に充分成熟した」(p.153)ことと、「これ以上待って呼吸を助ける機械などが必要になる」(p.153)ことを理由に、15歳の無名を「献灯使」として推薦した。作品中、日本を脱出することによって、無名の「新しい文明を築く」(p.48)ことに繋がっているという描き方は、まさに作者が日本現状に絶望した中から生まれてくる希望に燃える打開策だと言えよう。この点については、作者が、「外に出て、大陸に学ばないとだめなんじゃないか、という思いが込められていいます。(中略)日本を出て、海の向こうに渡って何かを学び、交流が始まり、鎖国が終わるというのが、この小説のひとつの希望になっているんです」[20]と披露した心境と一致している。

以上のように、日本が「地球が還元不可能なところまで汚染され」(p.30)たり、「土壌に含まれる多量の有害物質」(p.146)、「汚染度が高いと言われる魚」(p.65)のような人間が耐えていける限界に近づく極限の過酷な状況に置かれたりしても、「献灯使」に託された一縷の希望という主題を垣間見ることが出来る。

3.3「韋駄天どこまでも」の粗筋について

[20] 同前掲多和田葉子・ローバトキャベル対談 p.221

airiti

第３人称で語った「韋駄天どこまでも」の視点人物は東田一子とされている。作中時間を「食べられない米を育てる根気はこの先何年くらい続くのだろうか。汚染された環境下でも除草剤の使用が禁止されて以来」(p. 168)とし、空間を「茨城」(p. 168)に設定している。東田一子が生け花教室の帰りに生け花教室で知り合った東田十子(後述の「てんちゃん」とは同一人物・論者注)を誘って喫茶店でコーヒーを飲んでいる時に、地震が起きた。二人は、他人の誘導に従ってバスに乗り、避難所で「数日」(p. 183)を共に暮らしたが、東田十子が避難所にやってきた家族に迎えられて帰った後、独りで取り残されていた東田一子が校庭を走り続けている所で、物語が終る。

3.3.1 駄洒落の言葉遊びによって紛らわす時代的鬱憤

作品の所々、特に冒頭から４頁までは、集中的に連想力を駆使し、漢字を分解した偏や旁を活用し、**太字の文字で**表記しながら物語の内容が語られている。例えば、「教室内を見渡すと誰もこの見事な技に**驚**く様子もなく、馬の耳に念仏、平気な顔で無**駄**話を再開し、教室はいつの間にかまた**騒**がしくなっている」とあるように、馬という漢字の偏から発想し、物語の流れと一致した内容を綴っている。また、避難バスの中で東田一子と東田十子の二人が性的戯れをしている場面を、「てんちゃんは東田の「東」の字の口の中にまで手を突っ込んで、そこにある美味しそうな横棒をつかんで外へ引き出そうとする。(中略)二人は奪い、奪い合い、字体を変え、画数を変えながら、漢字だけが与えてくれる変な快楽を味わい尽くした」(p. 180)とされている。いずれも、漢字の偏や作りをうまく取り入れて、言葉遊びをしている。ここからは、作者が持つ漢字の造詣の深さの一面を示している。これらも前述の「献灯使」について作者が述べた「笑いながら真剣に考える」志向と同類である。「献灯使」で使った駄洒落の言葉遊びによって時代的鬱憤を紛らわす手法がここでも見られる。

3.3.2 性的変異の可能性

「献灯使」にある性的変異もここで見られる。東田一子が生け花

airiti

稽古の途中、トイレへ行く場面では、その前に歩く「てんちゃんの姿は消えていた」(p. 171)。そうして女子トイレに入った東田一子が「女子トイレの個室の戸はすべて開いていて誰も入っていなかった」(p. 171)と気づいたが、トイレに行くはずの東田十子が、女子トイレにいなかったら、男子トイレに入るしかないと推測されよう。もう1つの避難バスの中で二人が性的戯れをしている場面では、「十子の脚の交わったところに手をさしいれて、「十」の縦棒をつかんで揺らしながら引き寄せた。すると、堅くはまっていたはずの棒がはずれ、てんちゃんは「う」と言って身をそりかえした」(p. 180)と、東田十子の性別が実は男だということを匂わせている。さらに、避難所に届けてくれた衣服を選んで着る場面では、「男物のオーバーオールを着て、野球帽を後ろ向きにかぶって笑った」(p. 183)十子が一子に「誰の役やっているの」(p. 183)と聞かれた時に、「私の役」(p. 183)と答えた。以上の3つの場面を総合的に見てみると、十子が男性へと変換したとは明確に言えないにしても、自然環境に適応するために引き起こした性的突然変異の傾向があると見られる。

3.3.3「待つ」ことの意味

十子が避難所から去って行ったことを、一子は「時間のふるいにかけられると、楽しかった思い出は数限りなく記憶に残り、悲しかった思い出は一つしか残らない」(p. 183)と見ている。このような十子を「待つのはやめよう、忘れよう」(p. 184)と決心したにも関わらず、「待つのをやめているということが待っているのと同じだけの苦しさで一子を支配し続けた」(p. 184)と語り手が説明し、校庭に走り出した一子が「待つことを自分に禁じていた意固地がほどけてきた。待つことは悪いことじゃない」(p. 184)と一子は十子を待つことにしたのである。ここには、悲しかった思い出を楽しい思い出に変えようとする一子の意志が窺われよう。

以上のように、汚染された環境に再び地震が起きても、駄洒落の言葉遊びによって時代的鬱憤を紛らわし、性的変異を試み、人の温もりを待つように、絶望した中から生まれてくる希望を抱こうとす

airiti

る強い意志が伝わってくる。

3.4「不死の島」の粗筋について

「不死の島」では、語り手の日本人の「わたし」が、アメリカからベルリンの空港に到着し、パスポートの検査を受けて、「「あれから日本へ行っていない」と言うことで我が身の潔白を証明しようとした自分がなさけなかった」(p.190)という放射性物質を浴びた日本の厳しい現実に直面した時から、2011 年に起きた事件に遡って過去を語る。そして、途中から第 1 人称の語り手「わたし」が後景に下がり、アメリカ滞在中の 2023 年の夏にアメリカで出版された、ポルトガル人が書いた『フェルナン・メンデス・ピントの孫の不思議な旅』を頼りに鎖国された前近代江戸を思わせる日本の情報を前景に出して語った所で終る。この作品は、尻切れ蜻蛉で終る二重構造の語りになっている。放射性物質により環境が破壊され、鎖国された日本、東京の様子は、早死にする若者に関する「永遠の青春」(p.197)と、死ぬ能力ことを奪われた老人に関する「地獄草紙」(p.197)と言った言葉の表現に尽きる。

3.4.1「死ねない」老人対「衰弱」した若者

段々弱っていく若者を看護しなければならない益々元気になる老人の日本現状は、「身を焼きつくす炎や流れる血が目に見えるわけではない。哀しみも苦しみも形にないまま老人たちの心に蓄積していく。いくら一生懸命に介護しても、若い人から順に姿を消していく。未来のことを考える余裕などないうちに、次の大地震が襲ってきた」(P197) と描かれており、前述の作品「献灯使」にも触れられている[21]。ただし、「不死の島」では原因が放射能にあると明確に摘発しているが、「献灯使」では、その原因は曖昧にされている。

3.4.2 鎖国された日本の現状

[21] 同前掲多和田葉子・ローバトキャベル対談 P224 では、「最初は、「不死の島」をそのまま長くするつもりだったのですが、(中略)別の立つ位置から、もう一度、若者が弱って、年寄りが死ねない時代を書いたのが「献灯使」です」とある。

airiti

鎖国された東京では、海の幸も山の幸も危ないため、「東京に住む人たちは土ではなく綿を入れた鉢植えをビルの屋上やベランダに置いて、その中でインゲン豆やトマトを作って食べている」(p.198)。そして「長い夜をテレビなしに過ごすには本を読むしかないが、日没とともに停電になるので、語り部が現れ、(中略)しかし誰もがそのようにデフォルメされた江戸時代に満足しているわけではない」(p.198)。ここでは、日本社会が前近代の江戸時代に退化した面があるが、同時に「被爆した人たちを救うために昼も夜も医学の研究を続ける学者たちは(中略)文献を読みあさり、実験を重ね、答えを捜している」(pp.198-199)と悲惨な現状を諦めずに、医学の進歩を図り、日本の打開策を苦慮している一面もある。

それに加えて、題名の「不死の島」の「不死」を「husi」ではなく、「不治」(huji)でもなく、古き時代から日本列島に聳え立っており、日本を象徴する「富士(不二)」(huji)と読ませたい作者の気持ち[22]からも、「不死の島」(冨士の島)にも絶望の中に希望が託されていることが読み取れよう。

3.5「彼岸」の粗筋について

第3人称で語った「彼岸」は、18歳のアメリカ人のパイロットが「一ヶ月前に再稼動した原子発電所」(p.203)に衝突し、引き起こした原発事故から始まる。「火傷の痛みとの戦い」(p.208)、「その日、何千万人という人々が両手を前に伸ばしてよろけながら、近くの川や湖に向かって歩いていった」(p.209)、「運転席には運転手の影が焦げついて残っている」(p.209)と言った広島、長崎の原爆被爆をすぐ思わせる光景に続き、「頭をかち割られた原発という名前の怪物の怒りは、この先何千年、近寄る人間の肌を焼き続けるだろう」(p.209)という中、「生き延びる方法は一つしかなかった。それは日本を離れること」(p.209)とあるように、日本を脱出する主題が導き出されている。日本からの脱出者のうち、かつて「中国を侮辱する発言を重

[22] 2015年4月8日に論者が台湾淡江大学村上春樹研究センターに講演を招いた時に、作者多和田葉子から直接に聞いた。

airiti

ね、それについては国内でも国外でもかなり非難を浴びてきた」(p.211)参議院議員の瀬出郁夫がいる。中国を侮辱することによって、瀬出が政治舞台に健在しつつある一方、男性の「不能の悩み」(p.213)が解消された。こんな瀬出が日本を脱出し中国に入国しようとする際、中国人の「若い女性の役人」(p.218)から質問を受けた時、中国を侮辱したこともあったので、「朝鮮移住」(p.220)を希望したが、結局「不可」(p.220)と言われて、「相手は何か知っている。自分はもてあそばれているのだと瀬出は思った」(p.220)まま、物語が終る。

3.5.1 日本脱出と日本国の行方

「献灯使」に引き続いて、日本脱出のモチーフが再びここにも見られる。生き延びる道を求めて日本から脱出し中国に入国しようとした瀬出が「日本のフリーターやニートたちは、これから新しい中国市民として暖かく受け入れられ、きっと生活条件もこれまでよりよくなって、自分がこれまで暮らしていた「ニッポン」という名前だった島国の存在を完全に忘れてしまう。(中略)数年後には自分はアジアの巨大な多民族国家の構成要素である「ニッポン族」という少数民族であるという自覚の下にすがすがしく生きていくことになる」(p.215)と思っているように、日本から中国に脱出した後、少数民族「ニッポン族」として巨大国の中国に甘んじて、生き延びる可能性が約束されるということに繋がっている。ここでは、作者が試みに原発事故による日本国の消滅後、生き延びる道を考えてほしいという心境が汲み取れよう。

3.5.2 性的不能の解消

瀬出が大国中国を批判し続けてきた理由は、男性の不能に対する「長年の悩みが解決していることに気がついた」(p.213)からである。そして、人に知られていない性的「不能」(p.213)の瀬出は、「講演会が終わってから聴衆に、「大国を恐れず、男らしくて勇敢な発言をする」という励ましの言葉をもらうと、その「男らしい」という箇所で冷や汗が出た」(p.214)あるように、弱い所を突っ込まれるようで、励まされているようでもある。生理的な問題である性的不能を

airiti

政治の辛辣な発言によって解消していたことの描写が興味深い。

辛辣な政治的発言によって解消された個人の性的不能というユーモアに溢れた描写を、敢えて生き延びるために日本国が消滅する危機を齎した原発発電所の衝突事故に影響された日本を脱出しなければならない深刻な問題と並行させた所が、前述の作者が「笑いながら真剣に考える」志向と一致している。

3.6「動物たちのバベル」の粗筋について

3 幕に分けられた対話劇「動物たちのバベル」に登場した動物には、カタカナ表記のイヌ、ネコ、リス、キツネ、ウサギ、クマの 6 種類がいる。作品の空間は不明だが、作品の時間は漠然と「ある大洪水の後」(p. 222)とされている。第 1 幕ではネコが言った「人間は地球にとってはがん細胞みたいなものだったかもしれない」(p. 223)ように、人間批判をめぐって各登場人物(動物達)が話し合っている。第 2 幕では、バベルの塔を建設するために集まった動物達、例えばクマが「人間になろうとしたこともないし、これからなるつもりもない。それがわたしたちの共通点じゃないですか」(p. 244)と言ったように、人間批判を続けている。第 3 幕では、「人間たちは二十一世紀以降はみんな奴隷だった」(p. 263)の人間批判を軸にした方向を変えないが、バベルの塔を建設するために集まった動物達の中から、ボスの代わりに「翻訳者」(p. 257)の選出を主とする。「翻訳者」が「自分の利益を忘れ、みんなの考えを集め、その際生まれる不調和を一つの曲に作曲し、注釈をつけ、赤い糸を捜し、共通する願いに名前を与える」(p. 257)と定義されたが、これは実に否定された「最高権力者」(p. 257)の王権再建であることとは、本質的に変わっていない。そして、最後にウサギが観衆の人間に向かって「あなたはもし何でも知っている人に、一つだけ質問していいと言われたら、どういう質問をしますか」(p. 265)と言った所で、対話劇が終る。

3.6.1 性別の判別の不必要

第 1 幕の冒頭に「どの役も俳優は女でも男でもない」(p. 222)、対話にノアの船箱の「船長は美女で、下半身が魚。彼女の夫もやは

airiti

り女で」(p. 232)、第 2 幕の冒頭に「動物たちは人間のように服を着ている。(中略)性別ははっきりしない」(p. 235)、第 3 幕の冒頭には性別に関しては、明確にされていないが、「みんな人間と動物の中間ぐらいの状態にいる」(p. 254)とあるように、「ある大洪水の後」(p. 222)、生物性別の判別が特に必要とされなくなり、異性と結婚する必然性もなくなるという設定がされている。

3. 6. 2 人間への期待

第 1 幕で人間批判をしながらも、「人間は不思議な能力」(p. 227)を「エロス」(p. 227)と言い、「自然と人間との恋愛関係」(p. 227)を指摘したウサギが、能率的な「人間のやり方は、絶滅したのが不思議」(p. 229)だと言い、イヌは「人間の文明が変態文明。だから進歩的」(p. 222)と言っており、「人間が恋しい」(p. 223)と思うネコが「人間の行ったことのない場所のこともよく知っていた」(p. 228)と評価した。第 2 幕では、イヌが「わたしたちは人間とは違う社会をつくるつもりで出発したのに、いつのまにか人間の足跡に落ち込んでしまったような気がする」(p. 244)。また第 3 幕の最後には、動物たちが観衆の人間たちに向かって連続的に「今回の大洪水で奇跡的に生き残った一人の人間として、これからどんなことをしたいと思いますか」(p. 264)、「もしも過去を変えることができるとしたら、世界の歴史のどの部分をどんな風に変えたいです?」(p. 264)、「人類の滅亡の原因はどこにあると思いますか」(p. 264)、「もしあたなが大統領だったら、まず何をしますか」(p. 264)と聞いた。こうした質問の殆どは、反省と再建をこめたものばかりである。ここからは、絶滅したはずだが、生き残った人間へ託す希望が見えてくる。

4. エコクリティシズムによる『献灯使』の試み

本節では、第 3 節で分析した『献灯使』を、第 2 節で纏めたエコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」のような、ポスト 311 に特に必要とされる環境中心主義の観点から纏

airiti

めることにする。

『献灯使』で触れた、人間を生存の危機に立たせる大厄災、大洪水は、いずれも自然と人間との間に保つべき均衡的なバランスが崩れ、急激かつ過度な人間活動の広がりによって引き起こされた生態系の危機の証でもある。人間中心主義の解体から破壊された環境に適応しようとする環境中心主義に基づき、『献灯使』では「性的異変の進化」、「笑いながら真剣に考える志向」、「日本脱出の課題」の 3 つの方向性が示唆されている。

1 つ目の「性的異変の進化」であるが、人間が耐えていける限界を超えた過酷な自然環境に適応するために、生物が引き起こした性的変異は生き残るための対策、準備である。一見古代生物に戻ったような退化に見えるが、実は、深刻な現状を突破するために図る進化である。

2 つ目の「笑いながら真剣に考える志向」を再現するには、今まで述べてきたような、駄洒落の言葉遊びによって暗黒時代の鬱憤を紛らわす方法が挙げられる。最悪の自然環境に置かれた暗黒時代に絶望する中から生まれてくる、微かながら一縷の希望が託されている。今まで人間が行った環境破壊を深く反省し、希望を捨てずに真剣に打開策を考慮すべきである。

3 つ目の「日本脱出課題」とは、ポスト 311、必ずしも現実上、現存の日本国を脱出し外国に行かなければならいことを指すとは限らない。ポスト 311 の日本は、たとえ江戸時代と同じように完全に鎖国状況ではないにしても、前代未聞の原発事故の処理に対して、鎖国時代と同じような閉塞的な考え方を持って対応することではなく、外国との交流を進めて、新たな原発事故、放射能の生態環境・人体への影響に関する言説、警告に耳を傾けるべきだと、理解してもよかろう。

5. おわりに

人間が引き起こした原発事故を暗喩した大厄災、大洪水を描いた

airiti

『献灯使』は、人間が生存する生態系・自然環境を壊す危機が増大しつつある現在、エコクリティシズムによる人間中心主義の解体と環境中心主義を掲げる絶好なテキストである。エコクリティシズムの視点は、『献灯使』における生態系・自然環境との関係性を究明するために有効であった。考察した結果は下記のように纏められる。

『献灯使』が指さす「性的異変の進化」、「笑いながら真剣に考える志向」、「日本脱出の課題」の 3 つの方向性は、まさに震災をテーマに根気強く追求し続けている作者が意図とする所であろう。放射線を浴びた日本の近未来図を描こうとする多和田葉子は、作品「不死の島」以来、原発のテーマに関心を注ぎ、原発を書くことを通して、「書くという行為そのものに明るさを感じるんです」[23]、また「考えるという行為、そして書くという行為は、脳みその中に電気がパーッとつくような、エネルギーを生むんです」[24]として、極めて深刻な状況に陥った日本社会のことを日本人に強く意識してもらうために、こうした一種の寓喩的作品を書き上げた。いわば、環境問題を乗り越えるためには、近代の人間中心主義の解体が必要であり、作品中のさまざまな人間中心の否定は、人間ではなく環境が中心にならざるを得ない、そうした視野の転換の寓意であろう。従来のポストモダンというような抽象的脱近代ではなく、ここでは環境による人間中心主義の脱構築という、視点の大転換が試みられている。同時に、現在、日本が置かれている壊滅しつつある国家、社会の危機に対しては、『献灯使』に見られるように、人間中心主義が生み出した生態系への悪影響を、言語の規範（ラング）レベル、身体（性別、進化基準の再構築）レベル、行為（越境、海外からの視点）レベルで転換してこそ、別な生き延びる選択がありえるという希望をも与えているのである。『献灯使』は、ただの寓話として読まれてしまいそうであるが、環境問題による脱構築という近代人間中心主義の解体が行われない限り、環境の激変によって滅びの危機に立って

[23] 同前掲多和田葉子・ローバトキャベル対談 p. 222
[24] 同前掲多和田葉子・ローバトキャベル対談 p. 222

airiti

いる現代文明社会がポスト近代を迎えることは難しく、人間が大自然と真に共存共栄していく謙虚な道を探る道程はまだ遠い。

本論文は、104 年度科技部専題研究計畫(MOST 103-2410-H-032-060-MY2)による研究成果の一部分である。

テキスト

多和田葉子(2014)『献灯使』講談社

参考文献

(一)書籍・論文・雑誌

『朝日新聞社』2014 年 12 月 14 日

浅井千晶(2010)「『崖の上のポニョ』―海辺の生命の物語―」『千里金蘭大学紀要』7 号

ウルリヒ･ベック著・東廉・伊藤美登里訳(2011・初 1998)『危険社会新しい近代への道』法政大学出版局

加藤貞通(2007)「環境文学入門：自然とのコミュニケーションを回復する」『メディアと文化』第 3 号

柴田勝二(2011)「グローバリゼーションのなかの日本語文学―村上春樹・多和田葉子・リービ英雄―」『2011 年度台湾日本語文学国際学術研討会―全球化中的日本語文研究展望―会議論文集』台湾日本語文学会

野田研一(2003)『交感と表象―ネイチャーライティングとは何か』松柏社

松岡幸司(2011)「『1842 年 7 月 8 日日蝕』: 翻訳と解説―ネイチャーライティングとしてのシュティフター」『信州大学人文社会科学研究』4 号

(2015)『群像』1 月号講談社

(二)ネット資料

「2050 年の構想エネルギー・環境選択への未来 2014 年度報告書

airiti

2015.2.27」
http://www.jcer.or.jp/policy/pdf/150227_policy.pdf(2015年6月7日閲覧)
朝日新聞デジタル 2015年8月11日
http://www.asahi.com/articles/ASH8C00GBH8BTIPE046.html(2015年10月3日閲覧)
巴山岳人の論説
http://www.asle-japan.org/環境文学用語集/エコクリティシズム-環境批評-ecocriticism-environmental-criticism(2014年3月30日閲覧)

References

Asai,C.(2010)Gake no ue no ponyo: Umibe no seimei no monogatari. *Senrikinrandaigaku kiyo*,NO.7.

Beck,U.(1988)(Trs.)Azuma,K&Ito,M.(2011)*Kikenshakai: Atarashii kindaiheno michi*. Hoseidaigaku shuppankyoku.

Kato,S.(2007)Kankyobungaku nyumon: Shizen tono komyunikeshon wo kaifukusuru. *Medaia to bunka*,NO.3.

Matsuoka,K.(2011)「”1842nen7gatsu8nichi nisshoku” Honyaku to Kaisetsu: Neichaaraitingu toshiteno shutifutaa. *Shinshudaigaku jinbunshakaikagaku kenkyu*, NO.4.

Noda,K.(2003)*Kokan to hyosho: Neichaaraitingu towa nanika*. Shohakusha.

Shibata,S.(2011)Guroobarizeeshon no naka no nihonbungaku:Murakami Haruki, Tawada Yoko, Ribi Hideo. *2011nendo taiwannihongobungaku kokusaigakujyutsu kentoukai: Zenkyukachu no nihonbungakukenkyu tenbo Kaigi ronbunshu*. Taiwan nihongo bungakukai.

※2015年4月1日原稿受理、5月2日審査通過